

令和元年6月9日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11604

研究課題名(和文) 生体腎移植ドナーの看護支援モデル開発

研究課題名(英文) The development of continuous nursing care model for living kidney donors

研究代表者

高田 幸江 (Takada, Yukie)

武蔵野大学・看護学部・准教授

研究者番号：80529371

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、生体腎移植ドナーの継続的看護支援モデルを開発することであった。

先行研究で導き出した、生体腎移植ドナーの継続的看護支援モデルを臨床応用可能なモデルにするため、移植経験者交流会の実施・評価と、移植コーディネーターとのディスカッションを行った。交流会は、術前の生体腎移植ドナーの意思決定支援に、術後のドナーには経験を語る場となり、効果的な支援となることが示唆された。長期的フォローアップの継続には、術前の健康管理指導とレシピエントを通じた受診の促しが重要と示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本来移植医療は死体ドナーからの臓器提供により実施されることが望ましい。しかし日本で実施される腎移植は、死体ドナーからの臓器提供が極めて少なく、約9割が生体ドナーの腎提供によるものである。この背景から、腎不全で苦しむ家族のために腎臓を提供する生体ドナーが、腎提供後に片腎となっても心身ともに生涯に渡り健康であることは、重要な課題である。腎提供後のドナーの腎機能は70%程度に低下する傾向にあり、生涯渡り受診を継続し健康管理をすることが重要であるが、受診を長期間継続することは難しい。研究結果で明らかとなった受診継続のためのいくつかの方略は、臨床において活用可能な実践的な内容であり、一定の意義を有する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to establish the continuous nursing care model for living kidney donors. I have conducted and evaluated transplant experience exchange meetings, and held discussions with transplant coordinators in our quest to make the continuous nursing care model for living kidney donors that was derived from a previous study a clinically applicable model. To the pre-surgical living kidney donors, the exchange meetings became a type of decision-making support, and to the post-surgical donors a place to narrate their experiences. Thus, it was demonstrated that such meetings will become a source of effective support. The findings demonstrated that it is important for donors to be encouraged by the recipients to receive pre-surgical guidance on health control for the continuation of long-term follow-ups.

研究分野：移植看護学

キーワード：生体腎移植 ドナー 看護 支援モデル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の腎移植の8割強が生体移植であり、生体腎移植ドナーの生涯に渡るフォローアップの必要性が言われていた。研究者が継続して実施してきたこれまでの調査より、生体腎移植ドナーを長期に渡り継続的に支援していくための実態と課題、そして具体的な看護支援の方略とその時期について検討を深めることができた。これらの調査結果を受け、今まで各医療施設の裁量に任ざれており、支援の内容も期間もまちまちであった生体腎移植ドナーの看護において、生体腎移植ドナーの生涯にわたる継続的看護支援のための、臨床応用可能な看護支援モデルを開発する事を課題とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、先行研究で得られた研究結果を踏まえ、生体腎移植ドナーを術前から術後生涯に渡り継続的に支援するための継続的看護支援モデルを開発する事であった。

3. 研究の方法

方法は、以下の3つのプロセスで実行した。第1プロセスは、ドナー外来、患者会の実態調査、第2プロセスは、実践家と協働し、患者会の企画・開催およびアンケート結果の分析および患者用パンフレットの作成であった。そして第3プロセスは、先行研究結果および第1~2プロセスの内容を踏まえた看護支援モデル案に関する、移植コーディネーターとの意見交換であった。

看護支援モデルは、医療者側の視点だけでなく、実際に腎提供を行なったドナー側の視点を十分反映しそのニーズに合致していることと、臨床応用可能なモデルであることが求められる。このため、第1プロセスでは、患者会への参加、見学を計画する。患者主体で支え合うシステムの利点や課題を明らかにし、看護支援モデルの内容として盛り込むことが可能かどうか検討を行った。更に第3プロセスで、臨床家との意見交換を通じて臨床応用可能な看護支援モデルとするための示唆を得ることを計画した。

なお、今回構築した看護支援モデルの運用や、評価は、今後の研究課題とするため、今回の研究計画には含めないこととした。

4. 研究成果

以下より、研究方法のプロセスごとに結果を述べる。

1) 第1プロセス

患者会参加・患者会代表との意見交換

2015年5月に、NPO法人日本移植未来プロジェクトの生体腎移植ドナーの患者会に参加、患者会代表との患者会活用の利点と課題についてディスカッションを行なった。このことから、術前の生体腎移植ドナーが実際の経験者から腎提供の体験を直接聞くことは、腎提供後の状態や将来像を具体的にイメージすることのできる重要な情報源となっていた。このことから、患者会は術前のドナーにとって、意思決定支援の1つの方法として活用し得る事が示唆された。

また提供後のドナーにとって、患者会が自身の経験を語る場となっており、経験を整理し、自身にとっての意味づけを促進することに繋がっていた。更には、まだ移植医療が特殊な治療であることから、腎提供者が極めて少ない状況下で、患者会により同じ治療を選択した仲間とのつながりを持つことは精神的なサポートとなっていた。医療者を含めない患者同士の支えあいによって、術前のドナー候補者および術後のドナーそれぞれのニーズを満たしていることが明らかになった。課題としては、個々の経験が個別の物であるため、情報を得る側の方で全て自分に当てはまるかどうかはわからないことを認識しておく必要が有る。また患者会と医療者との連携についても、個人情報保護の課題はあるものの、課題を抱えた事例の把握に活用でき、適切な支援につなげることが可能となる事が示唆された。これらより、医療者が提供する様々な情報と、腎移植ドナーが希望した場合、患者会を活用していくことは、有効であると示唆された。

ドナー外来見学・移植コーディネーターとの意見交換

同年7月に、中京地区にある生体腎移植実施件数の多い病院のドナー外来を見学、看護の字サイト課題について移植コーディネーターとの意見交換を実施した。生体腎移植ドナー外来の見学では、術後の身体状況・心理・社会面のアセスメントの実際を学んだ。継続受診と生活習慣病の予防のための教育的支援の他、移植をどのように捉えているのかについて、面接によって把握していた。特にレシピエントが死亡したドナーとのかわりには、重点的に行われていた。移植コーディネーターとのディスカッションを通じて、術前の自発的提供の意思確認の方法について、多職種連携の観点で学びを得た。また、実際の現場では、受診継続を促すことが一番の課題となっており、生涯に渡るフォローを考えると、移植病院だけのフォローには限界があり、後方支援病院との連携が現実的であることが分かった。患者会の活用については、患者自身がその活用の必要性も含め、決定していることから、患者会の活用の課題については、看護の方面からは認められなかった。

2) 第2プロセス

2016年4月~1月には、生体腎移植ドナーに対する看護実践を行なっている病院の移植コー

ディネーターや看護師と共に、ドナー看護検討会を計9回実施し、腎移植看護実践者が捉えるドナー看護の課題を共有し、看護支援の方略を検討した。術前のドナーにおいては意思決定支援、腎提供後のドナーにおいては体験の共有の場として有効性が示唆された「患者交流会」を病院医師の助言の下、2017年1月に計画・実施した。

ドナー候補者6名、提供後ドナー10名、レシピエント候補者3名、移植後レシピエント9名、他透析患者、家族を含む40名の参加を得た。参加者へ実施した事後アンケートでは、おおむね満足されており、知りたい内容が得られた、アドバイスが他の人の役に立つことが嬉しいなど、移植候補者、移植経験者双方にとって良い経験となっていた。また今後の継続については100%が継続を希望していた。

なお、生体腎移植ドナー用パンフレットは、製薬会社（ノバルティス）が制作予定であることが分かったため、本研究で作成する計画を修正、今までの研究成果を踏まえ、生体腎移植ドナーが生涯に渡り活用し得る視点が盛り込まれるよう、意見を伝えた。

3) 第3プロセス

先行研究結果および、第1~2プロセスを踏まえ、継続的看護支援モデル案を作成した。それを基に、2019年1月~2月に3名の移植コーディネーターとの意見交換を実施した。この際、全国の移植実施施設に適応可能な示唆を得るために、年間移植件数が10件前後の施設と、100件を超す施設の移植コーディネーターを選定した。2015年のドナー外来見学後の移植コーディネーターとのディスカッションでも挙げたが、臨床現場からは、術後のフォローアップ外来でドナーが受診しなくなることを防止する事に関する事への課題が挙げた。

この課題に対する対策として、ドナーが通いやすい立地の病院へ紹介することによる継続看護の可能性が示唆された。特に重要と考えられたことは、ドナー自身による継続的な健康管理と診療継続の必要性に関して、術前に指導と教育を徹底する事が挙げられた。術前には、全身の検査や腎提供術に向けた身体準備と同時に、継続的な健康管理と受診の必要性の指導を実施し、これらの理解度や実行可能性を評価することが求められることが示唆された。また、生体腎移植ドナーは、レシピエントがドナーの提供後の健康状態に不安を抱いていることを認識しているため、ドナーに対してレシピエントから受診を促すことも有効であることが示唆された。術前に比較して術後のドナーとの十分な面談時間が確保できていないという課題が挙げたが、この対策としては単に移植コーディネーターの人数を増やしても、面談の場所が無いなどの限界があることが分かった。このことから、マンパワーの確保だけでなく、面談室確保などのハード面の改善も同時に必要となる事が明らかになった。

4) 生体腎移植ドナーの継続的看護支援モデル

これらの研究プロセスを経て、生体腎移植ドナーの継続的看護支援モデル（最終案）を作成した。図1に示す。

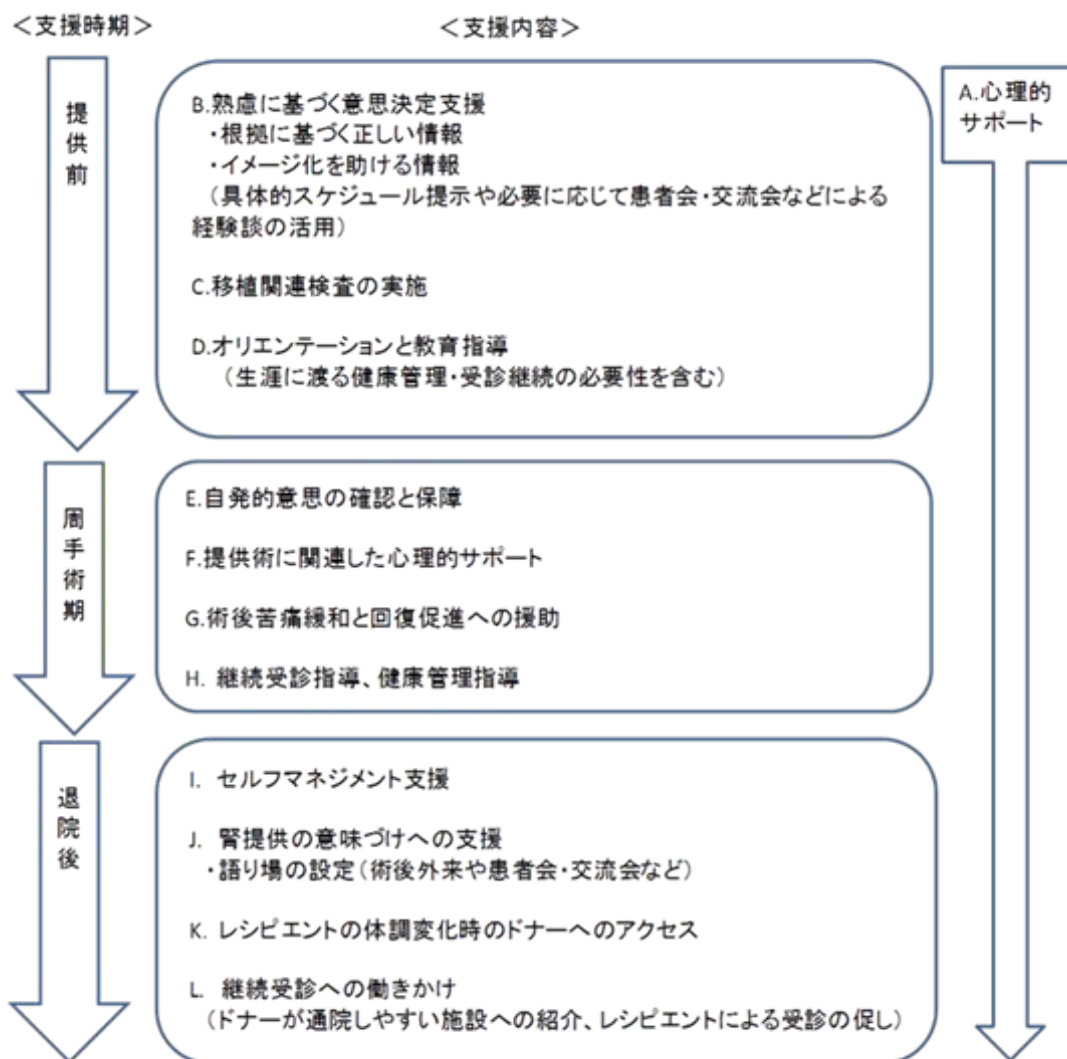


図1: 生体腎移植ドナーの継続的看護支援モデル(最終案)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Yukie Takada, Recognition of Kidney Donation by Living Kidney Donors That Accompanies Changes in the Recipients' Physical Condition: Focusing on Its Influences on Donors, Transplantation Proceedings, Volume 49, Issue 5, June 2017, Pages 944-949.

<https://doi.org/10.1016/j.transproceed.2017.03.023>

〔学会発表〕(計 3 件)

Yukie Takada, Impact of living kidney donors' recognition on recipients with deteriorating condition, Asian Transplantation Week 2017(Seoul, Korea)

高田幸江, レシピエントの体調が変化した生体腎移植ドナーの腎提供の認識とその影響, 第35回日本看護科学学会, 2015(広島, 日本)

Yukie Takada, A Comparison Between Nursing Care Needs for Living Kidney Donors and Nursing Issues Perceived by Nurses, CONFIRMATION/ENDA & WANS(4th WANS) Congress 2015(Hannover, Germany)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6．研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。